喀血劇場第十幕『極道、農家、正義の泡立荘』

ジャンル：ハードボイルドスチームパンクズンビーアポカリプス探偵モノ

〇登場人物

花　　探偵その１

千早　　探偵その２

紗崎　　依頼人

麦冬　　ズンビー関連業者

須磨　　比較ズンビー学の准教授

大葉　　農協の人

飯島　　京都府警の警察官

前説　　えーっと、開演前に、今一度、ズンビーに対する心構えを説明しておきます。

ご存知のとおり、二〇一六年に世界各地で同時多発的にズンビーが発生しました。ズンビーに襲われ、ズンビー化する人もたくさんいましたね。ズンビーになると筋肉が歯車に置き換わっていって、小さな歯車をぽろぽろこぼすようになる。少量なら大丈夫だけど、歯車を摂取しすぎるとズンビーになるし、歯車自体からズンビーが生まれるという説もありますが、まだはっきりしていません。いずれ研究が明らかにしてくれるでしょう。

ズンビー対策が確立されるまでは凶悪犯罪は日本全土で激増。京都キョートシティ市でもたくさんの被害が出ました。一九八〇年代のニューヨークは年間二〇〇〇件の殺人事件があったらしいですが、それ以上の地獄の様相でした。昼間外を歩けば、男も女も強姦されますし、夜間外を歩けばズンビーに襲われる。地獄です。

じゃあ、現在はどうかというと、ある程度、ズンビーはコントロール化にあります。とはいえ、完全に野放しではない、という程度ですけどね。ズンビーは昼間、森や暗渠、道路の下の川とかですね、そういう暗いところにいることが多い。ズンビーの監視体制が整い、危ないときにはズンビー注意報や警報が発せられて、住民の安全を守ります。

基本的にズンビーは群で行動します。動作は緩慢ですけど、群の対処は困難です。ズンビーは駆逐されたわけではないので、夜になって暗くなると、街にもズンビーがあふれだす。だから、その前に家に帰って、ちゃんと鍵をかけないと大変なことになります。時折、明るいうちに街に出てくるはぐれズンビーもいますけど、役所に通報すれば、市役所職員が駆除しに来てくれるし、単体ならあまり脅威ではありません。武装蒸気バスとか、路面蒸気機関車なら、普通にズンビーをはねてそのまま素通りしたりもしますね。

公安から認可を受けた民間企業も、個人から請け負ってズンビーを捕獲することがありますけど、市役所職員や、仕事柄、森林に近い農地に近づくことがある農協職員のような本格的な武装は許可されていないケースがほとんどです。せいぜい頑丈な虫取り網と、刺又程度。市民が銃を持っていることなんてありません。ありませんよ？

ああ、電気はどこへ消えたって？　ズンビーのエネルギー源になったに決まってるじゃないですか。関蒸、関西蒸気、旧関西電力の電気インフラはいまだにズンビーに占拠されたままです。通電はしてますけど、電圧が不安定で使用に耐えないんですね。燃料やインフラの運転・保守管理はどうしてるかって？　そんなこと知らないし、知ろうとしたら臨時政府に消されるぞ。

－ズンビーが出てくる。前説は気づかない。

前説　そもそも他国ではすでにズンビーを軍事転用するための研究が始まってるというのに、臨時政府は何をちんたらしてるんうわなにをするやめろくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこ。やめろ、携帯電話の電源は切ってくれ、うわあああああ！

－前説、ズンビーに襲われてはける。

－薄暗い室内。黒電話が鳴り響いている。音の合間には蒸気が出る黒電話である。部屋の片隅、人がいたようには見えなかったが、もぞもぞと動き出したのは千早。しばらくうめき、起き上がり、電話をにらむが、また寝る。

－階下から花。

花　ちょっとちょっとー。

－花、電話に出る。

花　はい、こちら泡立荘探偵事務所。あ、紗崎さん。（すいません、少し遅れそうで）あ、いえ、大丈夫ですよ。どのぐらいになりますか。(5 分ぐらいだと思うんですが) 5 分。全然大丈夫です。はい。じゃあお待ちしてます。はーい。

－花、電話切る。

花　ふー。ちょー、千早ちゃん、いつまで寝てんスか、はよ起きて。（と抱え起こす）
千早　むーりー。

花　　無理ちゃうよ。さすがに電話なってたら出て欲しいっス。
千早　　ごめん。
花　　ええけど。もう二時っスよ。もうすぐお客さん来るし。
千早　　二時？
花　　二時。
千早　　……頭痛い。
花　　そら、あんだけ飲んだらな。ほら、布団、たたんで。もう五分ぐらいでお客さん来るっスよ。

－階下に消える花。

千早　　私だって、ちゃんとしたいって思ってるよ。

－再び倒れ込む千早。

千早　　思ってるだけー。

－花、階下から水を入れたコップ（真鍮製）を持って出てくる。

花　　くぉら（こら）。
千早　　頭痛い。
花　　ほら、水。

－千早、渡された水を一気飲み。

千早　　くー。生き返るー。
花　　顔、洗ってきて。目やについてるっス。
千早　　了解。（と言って、また布団に倒れ込む千早）
花　　もう！
千早　　もう私は死んだと思ってもらっていいから。
花　　今、生き返ったやんか。お客さん、もう来るんスよ。
千早　　せっかくあの地獄を生き延びたのに、ここまでなんだ、私。

－千早を無視して、机を片付ける花。

千早　ねえ、花。私たちが生きた意味って、あったのかな。私、よく夢を見る。返り血を浴びた私はどす黒く染まって、足元には無数の屍が転がっているの。そんで、その中に虫の息のやつがいてね、そいつは私の脚を掴んでこう言うの。（裏声で）「花ちゃんは優しいから、ゲロ甘のパンケーキを作って食べさせてくれるよ」。

花　今、それどころじゃないっス。

－電話が鳴る。

花　ほら、もう着いた。（電話に出て）はい、泡立荘探偵事務所です。あ、到着されました？　ちょっと待ってくださいっス。（千早に）千早ちゃん、警報装置。

千早　ふぁい。（と、警報装置のスイッチを切る）

花　あ、もう警報装置の電源切ったんで、そのまま入っちゃってくださいっス。はい、お待ちしてまーす。（電話切る）ほら、千早ちゃん。

千早　オーケー、オーケー。（と言いながら布団をたたむ）

花　ちょっと、目ヤニ。

－花、千早の目ヤニを取ろうとするが、

千早　痛い痛い。

花　カチコチっスねえ。

－花、千早のコップの水に指をつけて、もう一度目ヤニを取る。

千早　ほい、取れた。

千早　かわいくなった？

花　かわいい、かわいい。

千早　なーおーざーりー。

花　おざなり、っスよ。

千早　おーざーなーりー。

紗崎　すいませーん。

花　あ、どうぞー。上っス、上。

－階下から頭を覗かせる紗崎。

紗崎　どうも、あの、電話で、あの、紗崎です。
花　はい。
紗崎　今日はどうぞよろしくお願いいたします。
花　あ、はい。
紗崎　変わった名前のビルですね。
花　あの、
紗崎　はい。
花　上がってきていただいていいでスか。
紗崎　あ、そうですね。そうですよね、すいません。
千早　おはようございます。
紗崎　あ、はい。あ、はじめまして。
花　どうぞ、こちらに。
紗崎　あ、はい。
花　千早ちゃん、お茶、お願いしまス。
千早　ふぁーい。

－千早、階下へ。

紗崎　変わった名前ですよね、泡立荘って。草じゃなくて、別荘の荘。
花　ああ、ビルの名前がそうなんで。昔、個室付き特殊ソープランド浴場だったんでス。
紗崎　ああ、特殊ソープランドよくじょ、あ、ああ。
花　背高泡立草と、石鹸の泡立ちをかけてて。
紗崎　ああ。
花　それで泡立荘。で、早速なんでスけど。
紗崎　はい。
花　お父さんによく似たズンビーを見つけた、と。

－千早、麦茶を持って上がってくる。

紗崎　はい、そうなんです。（麦茶を置かれ）あ、ありがとうございます。あの、

花　　はい。
紗崎　　こちらに伺えば、どうにかなるって。
花　　ああ、ええ。
紗崎　　警察にも行きましたけど、全然相手にしてもらえないし、これまで何軒も探偵を回りましたけど、やっぱりだめで、
花　　（さえぎるように）うん。そのお父さんに似たズンビーね、
紗崎　　そっくりなんです。
花　　先に結論から言いまスけど、
紗崎　　みんなが見間違いって。
花　　それはお父さんじゃありません。
紗崎　　はい。私もそう思って、え。
花　　人違いならぬ、ズンビー違いっス。
紗崎　　だって、本当に父そっくりで。
千早　　日本にどれだけズンビーがいると思う？
紗崎　　え、でも……。
花　　まあまあ、まずはお話聞きましょう。えっと（と、どこかにしまったメモを探しながら）、お父さんはズンビーパニックの時期に亡くなったんでしたっけ？
紗崎　　母はそう言っていました。
千早　　何か含みのある言い方だね。
紗崎　　父がいなくなってから一度、父が病院にいるという話を聞いたんです。

－花と千早、顔を見合わせる。

花　　ああ、続けてくださいっス。
紗崎　　小学校が再開した頃です。下校中に知らないおじさんに声をかけられました。「お父さんが事故に会って、病院に入院している。おじさんと一緒に行こう」。
花　　……いや、それ、誘拐の常套句やん。
紗崎　　え？
花　　ああ、いや。
千早　　それで？
紗崎　　父に会えると思って、うれしくて、母も一緒に連れていきたくて、
花　　はあ。
紗崎　　すぐに母を連れてくると言って、家に帰り、母を引っ張っていきました。

花　　そしたら、そのおじさんはもういなかったんスよね。

紗崎　　どうしてわかるんですか。さすが、探偵の人は違いますね。

千早　　よく今まで無事で生きてこれたね。

花　　あの、そのおじさんはともかく、紗崎さんがお父さんに似たズンビーを見たっていう話ですけど、

紗崎　　はい。

花　　ZUNDOKO 症候群ってご存じでスよね。

紗崎　　はい。

花　　**ズ**ンビーに**瓜**二つの**亡**くなった**誰**かの**面**影を**重**ねたせいで**襲**われる症候群。通称、ZUNDOKO 症候群。最近はほとんど聞かなくなりましたけど、ズンビーパニックから数年間は ZUNDOKO 症候群のせいで、ズンビーによる被害をいたずらに増やしました。

紗崎　　はい。でも、確かめたいんです。あのズンビーを見てから、父が帰ってきたんじゃないかと思うと、気が気じゃなくて。何度か、夜に探してみようと思ったこともあります。

花　　絶対だめっスよ。たまたまでス。間違いない。

紗崎　　だけど、もし本当にあれが父さんだとしたら、

花　　ないっス。

紗崎　　でも、

花　　ないっス。

紗崎　　……。

花　　ないっスよ。それはない。あり得ないっス。そもそもあいつらは何匹かの群で行動してまス。そのお父さんみたいなズンビーに運よく近づけたとして、どうするんすか。家に帰ろうって説得でもしまスか。言葉通じませんけど。そのときには、周りズンビーに囲まれちゃってまスよ。

紗崎　　……あの、

花　　はい。

紗崎　　こちらに来たら、助けていただけるって聞いたんです。

千早　　あー、やっぱりちゃんとは説明してくれなかったんだね。

花　　うちら、同業者からも鼻つまみ者でスしね。

紗崎　　どういうことですか？

花　　諦めてもらうんスよ。

紗崎　　え。

千早　　ちゃんと現実見て、ちゃんと諦めてもらわないとね。

花　　お母さんが遺してくれた生命保険が残り七〇〇万やんね（ふいに口をついて出た関西弁を言い直す）、でスよね。

千早　　それ使って現実と向き合って、そのあとは未来を向いて生きなきゃね。

紗崎　　はあ。

－暗転。